

お　ぼ　ろ　夜

長者になると口々に何れは長者ならぬ人の子や、小路隠れに呼ぶ聲するに暮るゝさうなと見上げれば、今の先迄唯黒かりし富士の姿の、渡船場のほとり過來つるわづか五足六足に消えて、げに星一つとおもふに一つならず二つ三つとこかしこ数はまきりて、向河岸なる阿波屋が二階に、はや銀燭のかやき出でぬ。あれ今棧橋に出たは誰であらう歟、屈んでなれば能くはわからねどお榮さんらしき春恰好、あんまりな此川隔てゝ女の呼びもならず呼んだとて用一つあるではなけれど、あの二階見るさへ名残とおもへば何やら知らず呼びたいやうな、吹くが風の常とはいへど添付もたぬ草の花、倒れてはならぬ身の愛き小夜着の襟に泣明かした昨日迄の奉公も、今日からおもへば残惜しく、明日なる運の末からおもへば猶残惜しく、つらいがつらいにならず嬉しいが嬉しいにならぬ人の世は、たとへば泡沫と誰かにきゝしを此處なる流れに見るにつけ、果敢ないものと今更の心地がする、せめては手招きにと思ふに諛のなければ通じたま

うな、こちら向きなさんした顔のくつきりと白いはお榮さんに紛れもなし、儼とはおない年のそれも三月の下なれど早くより馴れし水調子、淵にも瀬にもとんとまかす氣の元は中洲に居なさんしたとか二場所を渡り來て、おとす節のおのづから溶々としたるにあまり下りの音縮かしこく、厭なはみんな引受けましよと如才ない取廻し、男といふは死ぬものと突然の言葉は何故々々と人の問へば、女の十五は花の蕾口紅の何につくともなき心を、もうよからうとほんの通りがかりに吹く春風に、開かば大抵は薄かるべき命の末をも思はずつい諷知りそめて、今迄に持ちし男の数は三人、どうでも初手は失せぬ雛様氣きやしやをいはは白魚の事、舌障りのやはらかいばかりを好きしがあれこれかのえらみ喰ひに味しめて、後にはきりりと縋り加減の少しは骨の髄にあまるやうなもあつたなれど、一葉散り二葉散り三葉散る門の柳よりも脆いは人の秋にかぎらず、老少不定と御文章様のそでない諷議をなされたもの、あなかしこ儼の

は端から皆死にましたと、聞けば成程の内證もあけすけないつもの癖とて、傘の破れかぶれ末は棄てるやうな口つき、それはお前が丑なれば三世相にもあることぞ、どれが一番いとしかつたと問返されてさあ其事、初めなが可愛しいは女の忘れぬものと誰も承知、中なのも今に忘れねばやつぱり可愛しく、末なもまだ忘れるほどの日がなければ可愛しさはどれもこれも異りは無し、ことし廿一のこれなり税を納めて露寒き庵の白萩、新尼のひとりつくねんと竹縁の端に物思うても居られねば、これからは些憎いなを探しましよと立たうとしなさんしたを、それは又どうしてとあの時傍に居たは石切河岸から通ひ勤め、梶原と綿名に呼ばるゝ士族出の年嵩の意地悪のごますりの情なしの、さらでも出しやばるげぢ／＼眉、這ひかゝつて聞耳立つるに儼もおもはず朝の役目、ねぎめ拭きかけし手とむれば、笑止や可愛しいばかりが色であらうか、憎いたも持つて見ねば苦勞が誨ふる浮世の底とこりの正味は唯振つたではわかりませぬ、花なら盛りの一枝筒に活けたはいかさま美しいとまでの事、少々は散際の床柱にさびの見えて、捨てたくもあり捨てたくもなき差引が風流の汐といふもの、うつり香を肌着の袖

變らずもがな大事にとめて、夢に癡話するやうながいつ迄面白からう、憎からぬ初心のほどに死別れたれば、それで儂がのは後先いはず皆いとし、若し憎かりさうなが遣ちて居たら何も人助け、八幡取持を頼みますとつけくと言つてのけなさんしたに、板前の彌太さんとて最うこれ四十男、みづ貝のもとより片方なれど離れぬおもひを懸け居たるが、其一言の木枯しや圖らずさつと目口にしみこみて、雲吹飛ばす腕の晴れわざこちとらが面は向けられず、氣位の月の高ぞら返りたるあとの一段と凄からう、色は賣人の事以來袂にも手は觸れまいと俄の懺悔、それでは此日頃お前は儂に牛の角文字、涎に書かさば打つて附けの戀の証ほれて居たのか、鏡に表裏の透徹つたがなければ儂には見えなんだ、まことをいへば小簾の花影蜂も来て舞ふ志の殊勝なに、視儀なりと遣りましょと昨夜のまゝの紙包、ぼんと投出さんしたに一座はどつと瀧川の笑ひに落ちながら、小面の憎いと何彼に藤口の絶えなんだも、お客様のお榮くと一つは器量がたすけて、聲のたとと懸かるに女同志の妬みもあつたこと歟、今夜は足が冷えてならぬ、一處にと寝みなさんすに儂は新參 何事も厭とはいへず端からそつと這

入りしに、抱かれて寝ると抱いて寝ると、所詮これぎりの天地に次第は一つ、さうではないかとちつと顔見なさんすに儂は背けて、馴染浅き心の裡又してもと肩ひそむれば、何で其やうにお前は氣を置きなさる、重ねても薄絹もめん蒲團のたゞさへぎごちないに、肩がはせぬか足がはせぬか、師走にかゝつて人の娘風邪ひかせては儂がすまず、もつとこちらへと枕つき合せて、なあさうではないかと再言掛けなさんすを儂の猶臨蹠へば、明神の森の小鳥あけても暮れてもかうした事言うて居たら、定めしお前は面白いと思ひなさらう、いやく可笑しいと思ひなさらう、いづそ浅ましいいとも思ひなさらう、人といへば儂も人ういつらいはお互ひの身、おぼえて居て下され涙ためではなけれど、泣くも盡きず泣かぬも盡きぬにしめ、と海士の袖、しほたれて居るばかりが悲しいと限つたでもあるまい、花に月に春秋をよりわけて泣いて居るは、大方涙の種のたしなないのでがなあらう、泣かば儂等が生れぬ先から死んだ後迄、よしや泣通すとも止まりといふが世にあらう則、霞は老木の枝をもこめる、露は若木の葉をもそめる、畢竟ながめと思つて居たら何の仔細は無ささうな、一生は旅の東海道つぎくの

ちゃん／＼着て、京のあがりの日向ぼっこ孫のもりする何處のか婆様の、生恥曝すやうに言はれながらも百とは聞かなんだ、どう轉ばうにも數は知れた賽の目、附木引裂きて誰某と名をしるしたる墨のにじんだが、雙六のめぐり／＼て後に塔婆の形であらうぞ、儂は泣かぬにきめました、世間はいろ／＼せちがらひ中を蹂躪で呼ばるゝお方ありて、なんと十二分の手當は遣らうがと人橋かけて仰せられたを、折角なれど娘食ふほど、膽のすわつた親でもござりませぬと昔氣質は板屋の敷、ぶつかり次第びんと跳ねのけ鐵版張つて反返りしも、上總月のしつくりとは行かぬ瘡世帯朝夕に岡へて、嫁入支度の到底も手元ではなりかぬればと、一廉貯めさせる氣でこんな奉公に出したが親の不覺、何日と知れたら洗ひもならうに今ではおちぬ膝の酒じみ、何の彼のとつゝき散らされて猶一際のかれ心、まゝよ染色のこれが新衣にもどるでもあるまいと、われとわが身をすたり物のゆきたけかまはず、随分と馬鹿を盡しました、自然親の耳にも入りしに芝居するやうに襟袂おさへて、不孝の奴め其いたづらを誰がをしへた、どの道疵のつくとかればあの方が御懇の言葉の露、難有く承けてお屋敷へ上げたもの、妾でか

けと言はれうとも、捉厳しき園ひの裡、さう迄は行儀崩れず枝振のまんぞくであつたらうに、悔むも愚癡、降るも照るも初めから皆天のさづかり事、先頭藝者にと言うてくれた人もあつたなれど、盃のそこにはその模様見え透きてうつかり吞めぬ勤の内裏、あれにならぬがまだ性のあるのと思うて下され、氣骨折るほどならこんな處に僕は居ませぬ、末はいづこの野とも山とも、わからぬが人の世の面白いではなからう歟、お前がやうにいつもいつも、しよんぼりと雨の驚物案じ顔で此奉公は立ちにくい、何もお前これが唐紙の繪では無したまには羽ひろげて、そこらは知れた蘆の枯穂ばつとした料簡にもなつて見なされと、振向けば皆の寝たるに聲低く、しみ／＼と語副ぎなさんすに何と挨拶したものと、思ふも待たず僕等は腐れ玉子、きみゆる流れて悪い臭ひのつきそめたればうかへらず、それには尙日數のないお前の身、手堅くなされと年寄めいたことを言ふもの、我儘なだけ僕は妹、お前は何だか苦勞しなさるらしいにやつぱり姉様、仲好うしようではないかと囁きなさんすに僕はあの時、どうぞとばかり便りなきまゝ覺えず締着いた、何處の隅にどう潜んで居るともわからぬは情、それからこ

こに三月四月俄にお榮さんの慕はしく、湯にも連立ては頭物も見立てゝ貰うて、一も二もある人でなければならぬやうに思うたが、え、何たる不吉の星の僕が上にめぐり合せて、すぐ離れるといふも約束つく元々縁の無かつたのか、今一度こちら向きなさんしたらと待つに本意なやお客様のお入來とおぼしく、駈けるやうにして上つて往きなされた、内からお友さんの呼びなさんしたでもあらうぞと、來かゝりし河岸の柳の唯一本、わかき緑の髪や、亂れて往きともなげに暫し佇めば、やがて煙の木をも人もも淡く鎖づるにそと吐く息もそれにまぎれて、この程はぬるき水の面の、見るに漸く暗くなりぬ。あゝあのお友さんも稀なよい人、僕が末のおもひくらべて目に映るやうなと、それは／＼親身に泣いて下された、これが女中頭何分ともにと初の日見得に、其折はまだ名も知らなんだお榮さんの傍から口そへて紹介せなさんすを、おづ／＼と雲井わづかに仰ぎ視れば濃き生際のかりがね、おそろく北向の大部分の沖を越えて來なさんしたらしいに、誰やらが面影に生うつしと考へればそれよ鏡山の岩藤、無體なこと言掛けて町人の子と皆をいぢめなさんすのであらうと、元から僕は氣弱なさうな直ぐにも逃

歸りたい程にぞつとしたるに、忽ち其處に惡局が姿のあり／＼と現れて、言葉の端々何處か身をさすやうに思ひしも、月日とともに重なる馴染おのづから本末の測られて、心してきけば根から刺のあるでもなく、さはられぬを薔といへど女なればこそ眉つくりとも呼ばれて、やさしさは是れも春咲く花表面ではきめられず、それにもやつぱり忘れぬはあの移橋、丁度其日は火曜會のまだ何方も入らせられぬ晝の事、流し物する僕が帯の引指るではないかと跡から下りて來て、お前は一人つ子と口入の語に聞いたがと、どうやらしたつゞきから以前の事をたづねなさんすに、實はと言つて實は言へずこれと少しは取つくるうて、いづれ僕が口のぼつりぼつりとおもひ出すやうに始終を告げしに、おゝそれは氣の毒な咄かしお前はつらからう、されどこの世は乗合舟と昔からの譬喩もある、浮きも沈みもお前一人にさするでなければ、誰しもの事と必ず胸を痛めなさるな、聞けば極樂の唯じやらくらとさへして居ればこの奉公は済みさうなれど、見れば地獄の何とて呵責をまぬかれようぞ、四十は姥きつちりになりましたと洒落半分、何處にかまだ櫻にまじる氣で居たも三年跡、いつしか秋風の髪に吹入りて落つるを

白髪かと、老は初めの弱き哉まさかの事にも驚か
るゝに、猶朝晩を人に使はれてやがてこの儘
果ててもすべき儂が上にも、額に銀の一通りなら
ぬ辛苦はあつた、そも儂がこの奉公に出た
ころは今と違つてお客様のお客様のむづかし、何
から何まで定規づくめとお榮さんが所作をその
時一寸くさしたさんしたが、それでねと行水
の話を絶えず張出しの縁に腰掛けかへ、ひとり生
えの瓦松こちらが育ちのいいやしいに、玉の園生
の貴いは願はず唯堅氣なとおもふ矢先、勘く
も月に三度はきまり者の丹羽様とて、お連れの
有る無しによらず浮かれ鳥のいつも夜飲みに見
えたこゝの馴染の、儂にはそれらしい冗談一
つ言ひなされたでなかつたが、器量は問はぬ是
非買ひたい處があると唄のやうな觸出し、たと
ひこの大川の逆さに流るゝともれ程なは又と
あるまい、取外してはと人々のいふに儂も其氣
になりて、年は十から違つたれど嫁入したをま
あお前 幸福とおもひなさる歟、客とは空蟬の
世にこれも假の名、正體はもぬけの殻一時の
外見をのこすに過ぎず、必ずしもに夏衣の表
ばかりに目を留めなさるな、裏かく魂膽の願
に今もおそろしや、卸しもする小賣もする、
絲屋といへば通つたものと聞えは縛るに鮮かな

れど、思うたには似ぬ主が色酒、そめてかへら
ぬ遊び癖の碌々家によりつかねば、商人の長く
はつづかず締括りの儂がゆかぬ前から亂れて、
こゝまかしこも引負ひだらけ解くよしもなき内
輪の必迫、唯一人残りし小僧相手に留守する儂
の練廻せど、女にはならぬ暖簾の掛引たゝまる
苦勞を胸にをさめて、ぎつちり詰まりしむすび
玉のどう成行くかと相談旁々、折には異見めい
たことの一つもいへば、えゝくさくさすると其
儘ふいに羽織引被け、出れば帰りは日といはず
夜といはず微醉の衝楊子、夏冬の物とて儂も
多分の支度があつたでなけれど、枝に蛙の心
懸けて茶屋奉公のしがない中から、やつとの念
ひで取附けたを皆なくしたに、縫はれぬは人の
口段々に傳はりて、それは手前が敷されたのだ
あんな者と言つたら流石夫婦の中、腹を立たう
も知れぬがあんな者に添うて居て何日うだつが
上る、断れてしまへと親なき後は兄やら姉やら
あへば叱るやうに交るゝ言うてくれたれど、
運もある事さう一概にも行きますまいと、それ
を儂の昔かなんだは心残りといふではない、
落ちたる木の實の椎とも標とも、まぎれぬもの
なら初めから拾ふに仔細なけれど、よいつもり
なが悪かつたで今退いたら棄てるも同然、人の

ふびんは却つて襟垢の男が末にかゝりて、し
ばしなりとも歌三味線の浮いた岸に立つたが因
果、出がゆゆると水臭いは其管ででもあるやう
に儂が元の袖のかけはぎ、何う此うと洗ひ揚げ
てそこらあたりに行々嘸されう、おもへば去る
でもなし去らるゝでもなし今が大事の辛防時、
雪より後の松の採いつかは實意の彰れて、相
生のめでたきものと振返らるゝこともあらう歟
と、或夜は悲しくくやくしく恐ろしきあとゝの、
さうならぬを見て驚き起てば眠らぬつもり
の身は床の裡、あてし手を其まゝに胸撫下しなが
ら、取直す氣のいとやきもきと儂一人があせ
り立つれど、肝心の男の張もなく意地もなく
義理もなく乾枯らびし魂の紙風船、懷に物さ
へ這入ればふはりくんと飛廻りて、息のぬける
とひとしくべたりと元の火鉢の前、あるまじき
は算盤持つ身の胡坐かきて口から出放題の大き
な事はかりならべて居るに、三方四方あきたる
穴のいよゝひろがりて寄せも引きも遂にかな
はず、仕入残りの品諸共詮方なければ人手に渡
し、昨日を表店のさりとて錦とおおほえぬに
今日は檣樓の裏家住居、それ見ると兄なり姉な
りたがはぬ眼鏡を今更のやうに誇るに猶棄てら
れず、賣喰ひのさうゝはなり離ければどうが

なしてと儼のせがむに、組合の書記とかいふものに男は漸く住込みて、かつ／＼ながら先づありつきし其年の冬の半、空もしぐる、袖もしぐる、儲けし兒を肌を抱きて、物思ふ夜の月は黒かるべし炭團埋けかへ、いつもの時刻の疾うに過ぎたにと出づりつりの路次の足音、駒下駄なりしがと聞耳立つれど男は歸らず、あくる日人の來てたづぬるに此方よりこそといへば、はてなと首傾けたは譯のある事、輒ともすればやぐさ男に有勝ちの不料簡どかりと遣る氣の相場にでもかゝつたもの歟、勤務の上にも大分明るからぬ始末の出来て居たさうな、一日二日と後髪よもやにひかされて待ちたれど影も見せぬは正しく逐電、何といふ胸甲斐ない人かと怨めど歎けど及ばぬに儼は家をたゝみて、顔向けのならぬを知りつゝ一先姉の許へ戻つたは三日、老先長き身のいつ迄寄食人でもすまされねば、仕合せと早く乳の放れしに兒だけ預けて、儼は邯鄲の夢の阿波屋一炊の間の榮華とて見たでなければど覺むればもとの女中奉公、入れ直す髪の小枕もう／＼懲りしに男は持たず、それなりけりの寢起をこゝに送りて其兒というたも今では十九、この間も逢ひに來た娘をお前もそれとは察して居なさう、器量はよからずと

も儼には珠の一粒もの、根掛も指環も櫛簪もねだらぬほど猶貫つて造りたく、片親とおもふに可憐しさの加はりて儼等が勤は水の月、手にたまたぬを無理にもためてつましくするもあの兒が爲、請取一通緋入一枚並々の書縫ひはおぼえてくれと、諺の夜の鶴我飼殺しの分をも忘れて、さもなき事に側居れば何如かと案ずるより外に、あゝ儼とても何樂みのない明暮とあら／＼ながらの物語、聞けば尤も一人々々に愛身の果、曰くはあると其時は思ふたが膽先づ潰るゝ今度の一條、つらいとも悲しいともこの心持一つの適當なる言葉も無い、たよらば柱はこゝの旦那中間へ立つて貰うたら、今一吹の嵐の家あぶない處も又何とか、支へのつかぬでもあるまいとお友さんの力を入れて、落ちかゝる災難に手にでも受けるやうに驢いで下されたなれど、父様がもぎだうは今始まつた譯でもなし、言出したらきかぬ氣性人をも思ひなさらず、おれが娘勝手にするとお定りのあくたいもくたい、誰にでも喰つて蒐りなさにさうなつては恥の上塗、どちらへも儼が立たねばとかたはぬ次第を涙に告げて、泣く暇貰うて別れたは昨日の今頃、母子のやうに思うて下されたお友さんも、姉妹のやうに思うて下さ

れたお榮さんも、何日また逢ふとも測られぬに迭ひに他人、世界の親子兄弟が皆この通り他人で居たなら、貧富の外の夢なりともせめては今より安からう、短いが美しく長いが醜き道理でもあること歟、たのまね佛は他人なり言うては済まねど鬼は父様、たのむに却つて苛げられておつけ骨をも削られう、運と不運の境界が線なら儼は外で生れたさうな、殆ど馬癡も言飽いたと猶去りやらず眺むる空、河こそそりと這ひ來る轡のなぶるが如く耳に入るに、聴きともなや聴きともなや、この鐘なりときかぬ里のあれかしと思はずぞつと心裏に震へて、又叱られうぞとわつかに立ちかゝる御藏橋の袂、駈來る車を中に隔てゝ行進ひし男の姿、あ安ちやんと避ける機會に躓きながら見るより早く呼留むれば、濱さんかと彼方よりも近きて聲懸くるに、縋らんとしたる手と手と執合ひてこゝは小高き欄干のほとり、歩むともなくあゆみ寄れば、十三日の月の出際、唯赤く唯大きなが東の水門に懸かりて、振向けば誰そや今宵の名のみなれども首尾の松影、猿屋町にのこれる櫓を掛けて一面にかすみぬ。顔色の悪いは儼よりお前、どうしなさんしたと女は指寄りて、親戚なれば飛びもならず明日からは籠の鳥、くけ細の

赤い青いに彩られて鳴け鳴けと知らぬ機端に、音を慰みの誰が前にも促らるゝのであらう、重ぬる二人が思羽のもし離されて、儼は賣らるるにきまりました、花も人も今こそと土手に咲きつき出つづ伊達模様、かざす扇のうかれうかれて色香に酔ふが羨ましいいではなけれど、儼に限つて撫廻す風の黒く冷たく、じりりと地の底深く引込まるゝやうなを何故かとそれは悲しい、盛りの春なら春らしく甲乙共に都は長閑でありさうな、天道も片手落いかなる憎しみを受けたもの歟、繰返すだけが思なれどお前がまだ石原に居なさんした頃、若い衆のこゝろに生ふるは孰れも蓬の風儀わるきに、煙管筒屋の安ちゃん一人は町内に交る麻の目に立ちてしをらしく、祭ででもなければ夜遊びに出るではなく、稼柄に似ぬ内氣者、神妙に働きなさんと儼の母様が言ひなさんしたを、さうかなと見るに風采のおのづから軋れて、不圖其儘を心に留めたが今でいうたら迷ひであらう、あのねと呼ばれて何えといそ／＼駈着くれば、何でもない又たまされながらあかず顔見合せて、唯莞爾とするが戀ならば戀とは神の幼兒が一度は誨ふる戯れや、頭が病めると儼の母様が二月越しの長わづらひ、薬もきかず鍼もきかずあの

時は儼も一處に逝きたかつた、命は明方の音せぬ風に採まるゝ孤燈の光、かき立つる丁子のあれといふ間に空しく落ちて、還らぬ事になつた以来遺されし儼の間に絶るはお前の母様、これもどうぞと甘えるやうに持込む面倒をいつでもおいでと萬事の世話、張板貸して下さらぬか、盥をお使ひなさらぬかと繁々の出入に向前的馴染は母様の折よりまさりて、相合炬燵のどちらから寄るともなく隔てぬ譯のお前とできたを、當座は人の湯歸りにも指さす程にはやしたれど、何のあれは疾うからの約束、其内表向きになる筈と稽古所の房さんはあの邊での女作者、面白づくに觸立てたかやがては誰もからはぬにもうお許しの出た料簡、夕月の影踏む戸口に互ひに咄れて呼交はすを、あはれとお前の母様の薄々は承知の上、嫁にほしと言ひなさんしたにこれは大事のひとり娘、ばらりとした目鼻立ちを三層倍四層倍、もつとも親は見ます、出世とは女にある事迫て左團扇の歡樂も盡したいなれば、遣られませぬと儼の父様が憎體な挨拶振、にべもしももあるどころか家には置けぬと騒ぎ廻つて、夢みし儼が悦びは消ゆるに早き春の雪の、阿波屋へ奉公に出しなさんしたにお前の母様もいつかな負けぬ

氣、こちらとても掛替のないひとり息子、職人の素より四角な物は讀めませぬが、讀む人よりは稼も地道、恐らく孝行もしてくれまする、世間に若い女の種が急に切れたといふではなし、器量ぐらゐの望んで望めぬ事もありますまいと、立出でて門にあてこする腰障子の明暮、唯がたびしと井戸流しにも顔をむけて、角突合ひの果がこゝに居ずともと今の安宅へ俄の引越、儼とお前は繪草紙に見る妹山香山、中を大川の横はりしてしばしといへども流るゝ月日、逢瀬はそれゆゑ絶えたれどおもひはそれゆゑ猶絶えず、二階の廣間にお手が鳴るわづかな隙をも靦干にもたれて、つく息のよしや微かなりともまかせぬ胸の萬分一、送り風の吹分けて囁く程にはとどきもするかと、戀は何處迄みじめなのやらじれるに噴裂く極神の袖、涙に色の無ければと忘れぬを諫めとは思つて下さるまい、髪結のお虎さんが好でもあり梳手でもあり、跡嗣でもある筈の松や／＼と呼ばれたはお前も知つての泣黒子、目にとまる取合せのをかしければ縁は異なものこれは判じ物と、其ころ人の笑うた看板書きの助さんと再々と落人筋、見るかや野邊をほつき歩いて有金をつかひ果たすに、とう／＼お虎さんも我を折つて外手町の親方を

假の仲人、近間な處と火の見下へ別に世帯を持たせに、何がして好いた同志のいざこざも起らず最合の筈、腹にあつた小いの程なく生れたと、殊更の例に引くでもないが逃げるといふは造作もない事、寧あの通りに行くものならと常住愚癡の浮びながら、父様も追々たる年の床屋が鏡に、髻濡めす手障りの少しは瘦せた影形を我れと可憐しがる時の来ようも知れず、實のではありませんけど石置場の伯母さんもあるとなれば、其時理解をきかせたらと分別らしく考へたもやつぱり若氣の無分別、初めから添はれぬに定つて居たのであらう、さうと知らねば客の手前帳場の手前、朋輩衆の手前は勿論眼詰める氣がね氣くばりは蜘蛛の絲、風の簷端に並大抵のがまんではなかつた、聞いて下され僕が行つたは去年の盆過、座敷は見習ひのまだいくらも経たぬ九月のはじめの夜、酒は名代のちびりくんと長つ尻の御前が漸くお立ちのあと、上の間からさげる杯盤の仕附ねば廊下の手ぶらつきて、生憎それは由ある皿の重ね方でもわるかつたか、はつと思ふより早くすべり落ちて眞二つ、そんな事で通ひができるかと散々に叱らるうしろから、洗方の萬どんといふが何の氣もなく覗き込んだを、内々舌でも出

すかと振返りたいほどに身のひがまれて、粗忽は僕の重々詫びても足らぬものに承知しながら、それとは別のやうな別でないやうな悲しさくやしきと、寐てからの枕に前髪の毀れかゝるも厭はずひたと噴着いて、いつ迄もいつ迄も今度鳴つたら三時のいつ迄も眠られず、宵は絃歌のよそより賑しきに更けてはよそより一際寂しく、遠く響くぼつくりの此れは雛妓の睡さうなればと、夜あかしの四疊半に吟味取りの氣が附いて遅ればせのお暇、箱丁と二人が代地邊から歸るとおぼし橋そこくに渡りて新道の中程に晋の止まりしと耳には定かにきく分くれど、心には分かぬ物の影の右左に駆けめぐりて、寧この夜を起きて居ようかと思ふ折しもばらくくと一村雨、頭をもたぐれば密漏る薄明りの全然月は隠れしにもあらず、四隣は今を夢の最中に斷れつ續きつ壁近く鳴く蟋蟀の聲、肩させ据せと必ずなりし母様が口癖の憶ひ出されて、何やらひやりと陽にしみ透るやうなとともに、寒さに逐はるゝ針の手元の在りしかはらず、姿はまぼろしの眼を閉れども猶且見ゆるに、其儘僕の滅えもするかとほんに堪難かつた、それも日数の餘儀なく勵すにわづかに馴れの來たとばかり、何處でなりとも負はねばならぬ苦の

薄らぐと言つては誰にもあるまい、ほつと一肩休めますか休まされぬに又も災難は降りかゝる木葉舟、かひなき身にも藻掻かせて遂には巻込む波の思惑、それなら初から沈まうにも底には底の流れ絶えず、朽ちて腐れて跡留めぬ迄いなむが慣ひの興でもあらう、紅白粉は皆の化粧と思うたに僕には明日からの涙の種、泣くやうな中の二人でない心裡にいつやら叱つたなれど、斯うなつて考へればやつぱり泣くが世の定め歟、善惡俱にまゝならず正氣で置かるゝが恨めしいと、聲先づうるめば眼も泪むに折柄の風がよそくしく、だらく下りなる角屋敷の淡紅色の花しづかに散りて、但しはこれにも利げとや女が鶴の前垂を遊ぶが如く吹返しぬ。

(明治三十年十一月作 前半畢)